

秘

ひでん

伝

高橋治

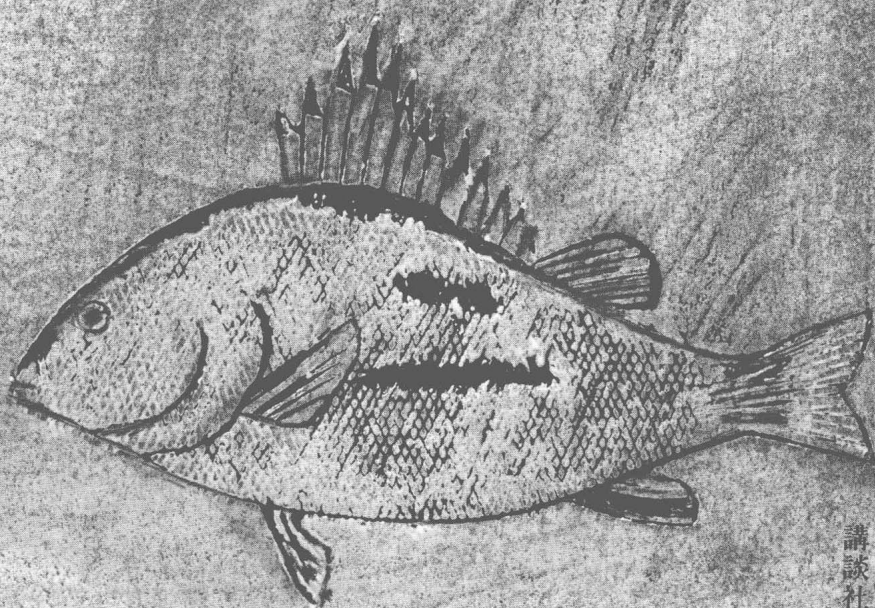


秋

ひでん

伝

高橋治



初出誌

秘伝(小説現代昭和58年11月号)
赤い海(小説現代昭和59年3月号)

秘伝

昭和五十九年二月十日 第一刷発行

著者 高橋 治

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二／郵便番号二二二
電話東京〇三九四五―二二二(大代表)／振替東京八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価 九八〇円



落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。

© Osamu Takahashi 1984, Printed in Japan

高橋 治

昭和四年千葉県生れ。東京大学文学部国文科卒。松竹株式会社入社。三十五年より監督作品、戯曲を発表。四十年松竹を退社し、本格的な執筆活動に入る。主な作品に「派兵・第一部」第4部、「絢爛たる影絵」等がある。

秘 伝
赤い海

目次

127 5

題 裝
字 丁

坂 畑
野 農
雄 照
一 雄

秘 伝

長崎県西彼杵半島^{にしそのぞ}の西海岸では、山の斜面が急な崖になって海に下っている。そのために、沖合に朝の光がさし始めても、陸はまだ暗い。

犬が来る。

暗い切通しの中を自分の方に近づいて来るものを見て、永淵良造^{ながふちりょうぞう}はそう思った。

永淵が立っている式見^{しきみ}の港も、五月の四時近くだというのに、まだ夜が残っていた。動いて来るものは手足を器用に運んでいるのだが、犬にしては送り足の弾みがない。上下動よりも左右の揺れが大きい。

切通しをすぎるあたりで崖が低くなっている。そこだけに朝の気配が漂っていて、光とはいえないほどの明るさがある。永淵の方に近寄って来るものが、その中に入った。

犬ではない。

永淵は気づいた。

予想していなければならぬはずだった。

と思うより先に、永淵は歩き出していた。永淵の足は右足が左足より十五センチほど短い。歩けば体が大きく左右に揺らぐ。揺れながら永淵は急ぎ足になった。歩くことなら、まだ、自分の方が相手よりも自由だろうと思ったからだ。

「永淵さんねえ……え？」

動いて来ながら相手が呼びかけて来た。近づいて見て、その動きの早さに驚かされた。昔は蹙いまりと呼ばれた障害者である。永淵は両足が完全になえてしていると聞いていたのだが、漠然と想像していた不自由さとはまるで違うのだ。両手の掌てのひらと両膝を使って歩くのだが、健康な人間にも敗まけないほどの速さがある。

「はい。岸浪きしなみさんかいのーう」

永淵が呼び返した時には、もう顔も見分けられる距離に来ていた。永淵は数歩歩み寄って相手の前に立ちどまった。岸浪は地べたに座りこんだ形になって永淵を見上げている。

「永淵良造ですばい」

「おうおう」

見上げた皺だらけの顔が人の善よさそうな笑いで崩れきっていた。その顔のままで、五度、六度とうなずいて見せた。永淵は笑顔に吸い寄せられるように跪ひざまずいた。

「初めてお眼にかかります」

「おう、おう、わしが岸浪庸助ようすけばい。よう、来てくれなはったな。どんなに、あんたに会いと思ううちよったか」

「いや、おいの方こそ……。岸浪さんに会わんうちにや死なれんと思うとりました」

「なんばいうとね。……茂木もぎに永淵という船頭のおつて、鯛たいば釣つらしたら、この岸浪にも敗まけん……。そげん話ば聞きくたびに会いとうして、会いとうして……。こん足さえちゃんとしとったら

と、どげん口惜しか思えばこらえて来たこつか」

「そりゃ同じこつてすたい。おいも」

「もう、何年……二十年近くになるやろ。……評判ば聞きたびに、どげん男かと思えばめぐらしとった。あんた良か男たい。漁師にしとくにや勿体なかごたる。ようけ女子おなこば泣かしたもんじやろ」永淵は苦笑した。岸浪のいう通り、整った顔つきを際立たせている濃い眉毛が、笑顔になるとやや下って、表情に優しさがあふれる。

返事も待たず、岸浪はつと両手をのぼし、永淵の手を包みこんだ。

「……会うたなあ。……なあ、永淵さん。……こげん、いざりとびつことが。……ほんなこつ……よう会えたもんたいね」

永淵はただうなずき返した。

「永淵さん、あんた、年齢としはいくつな？」

「六十一ですたい」

「若っか……となあ。まっでわが子んごたる」

「岸浪さん、ああたは？」

「七十五たい。……爺いになってしもうた。……ほんによか爺いになってしもうて。……墓所はかしよの段近うなつて来て……」

いい終えぬうちに岸浪がふくみ笑いを洩らした。

「行こや、永淵さん。ここは道路たい。座敷じやなかと。座りこんで挨拶ばする場所じやなかつた」

い」

「行きまっしょう」

永淵は岸浪の脇の下から腕を廻して立たせてやろうとした。

「なんて？ ……立て……とね？」

岸浪は永淵の手を払いのけると、ずっと立って見せた。信じられないような滑らかな体の動きだった。身長一メートル六十五センチの永淵よりは十センチほど低い。だが、上体のたくましさは、筋肉質で締った永淵より遥かに優^{まさ}っていた。足以上に手を使うせいだろう。

「立つことはなんの不自由さもなく。歩かれんだけんこつ……。で、立ってどげんすつと」
「うんにゃ……その」

もう一度腕を廻し、永淵は岸浪の歩き出すのを助けてやろうとした。

「あんたらしゅうもなか」

思いがけぬ烈しい語調で岸浪がいった。

「長年、そんな不自由か足で生きとって、人様ん情けにすがったこつのいっぺんでもあつとね。助けくれちいうたことはなかじゃろが」

「……うんにゃ」

「そげんなら、わしも同じこつたい。……ほら」

岸浪は立った時のようにすつと膝をついた。

「行こや」

永淵の方に振り向くと、港の方向を顎で示した。両膝には草鞋わらじのようなものがくくりつけてある。その膝と手で、すたすたと永淵の先を動いて行く。永淵の方が遅れそうになる速さだった。

「な、永淵さん」

「へ？」

「知らんもんが遠くから見ちよったら、足ん不自由か男が、犬ば連れて散歩しとるごと思うじゃろねえ」

「そげなこたあ……」

といったまま言葉をのんでしまった。答えようがなかった。

「茂木ん永淵、式見ん岸浪ちいわれて、少しや名の知られとるもんどうしとは思うちやくれんじやろ。……面白かもんたい。……人生ちゆうもんは」

岸浪は朝の静けさを揺さぶるように笑った。

その半月ほど前、永淵は一通のはがきを受けとった。

長崎市 もぎ

鯛つりの名人

ながふち りようぞう さま

宛書も宛書だが、ひどい字のまずさに、永淵はどこかの小学生が出したものだと思った。確かに、茂木の町の中でなら、名人永淵で通る。同姓は多いが、鯛の永淵といえば、間違える人はいない。

全国的には枇杷の産地として名高いが、茂木は誇り高い漁師の町である。漁業組合員の九割近くが、小さいながら自分の船を持ち、腕一本で生計をたてている。そんな昔話に近い漁業のありようがまだ茂木には現存する。それは専ら茂木の立地条件によることなのだ。天草、島原、長崎半島、五島列島と、このあたりの地形は複雑さのきわみなのだが、それがそのまま海底の様相にまで及んでいる。

漁師の言葉で、根々というのだが、起伏の多い海底一面に岩礁がちりばめられ、その根々にはエビ、カニ等の甲殻類をはじめとして多くの種類の小魚が集る。それらが鯛、スズキ、アラ、平目などの高級魚を招き寄せる餌の役割を果たす。釣ひと筋の漁師たちが生きて行ける道理なのだ。

港としての茂木は決して大きくはない。東南に口を開いた巾着のような小さな湾は、周囲を屏風を立て廻した形の山に囲まれている。そのせいか、すき間もないほど湾内につながれた四百艘近い小船は、いかにも憩いの場所に置かれているように見える。港がある種の豊かさを漂わせている。

その豊かさの中で、四季を通じ、永淵は他の魚には眼もくれず、鯛だけを狙った。そうした生き方が、特異な性格を持つ漁港茂木の中で、ことさら永淵を際立たせた存在に押し上げていた。

だから、不備な宛書のはがきが、迷わずに永淵のもとに届いたのは、少しも奇妙なことではない。

奇妙なのはその内容だった。

わしゃもうすぐ死ぬとじゃけん

ながふちさん あんたにきてほしか

死んまえに ふたりでイオ（魚）つりばしたかと あんたからこっちに きてもらわれんじやろ
か

わしゃがっこにもいききらんじやったもんのか 字はかききらん ようよみもきらん

そげんおとこばってんが

あんたにあいたか

五月十日の四じに

式見のみなとに べんとばつくって まತ್ತとるけん

きてくれまっせ

岸浪庸助

永淵は長い電報のような文面をなん度も読み直した。

書かれている通りのことなのか、それともなにか別の意図があつてのことなのか、その辺のどこ

ろが読みとりにくかった。素直に受けとるにしても、なにかを勧ぐるにしても、これは漁師の人生に滅多に起こることではない。

勿論、永淵は岸浪という男が式見にいることは知っていた。というより、岸浪にまつわる多くの伝説のような噂を聞かされていた。釣客を乗せて漁に出た場合、客が釣り落とした魚を、殆ど間を置かずに釣り戻す。ある俄か成金^{にや}が、眼の下一尺五寸の鯛を十尾^び釣り上げると注文を出したところ、鼻歌まじりにやりとげて、賭金の百万円をせしめた。その間、注文に合わない魚は全部自分から糸を切って水面まで上げなかったというような話である。

船頭を一日買いきり、鯛やスズキなど超高級魚だけを狙う釣を大名釣という。大名釣専門の岸浪ほどではないが、永淵もそのような客をとる。大名釣の、良い客というものは釣果^{ちやうか}は余り問題にせず海に遊ぶことを楽しむ。釣れなくてもとの超高級魚なのだ。それだけに、永淵はそんな客を大事にした。

ところが、大事にしている客ほど、式見の岸浪をほめた。永淵も上手といわれているだけに伝説の類^{たぐ}いは余り信じなかった。偶然に脚色が加わったものと、底が見えた話に思えたからである。だが、大切になっている客たちのほめ言葉は無視出来なかった。その位の客になれば、船頭の腕^{しめ}を確と見ぬいているからだった。

二人を並べて勝負させてみたい。それが夢だと笑う客も少なくはなかった。

「二人のうちどっちが勝つじやるか」

露骨に口に出す客もなかったわけではない。そんな言葉を聞くと、永淵は微笑で誤魔化すことに

していたが、いわれるたびに、内心では腹を立てていた。ただ、その怒りが、岸浪に向けられたものなのか、無遠慮な客に向けられたものなのか、考えてみると、自分でもよくわからなくなるのだった。

茂木と式見は、殆ど等距離で南北から長崎をはさむ位置にある上に、どちらも鯛の好漁場で名高い。その二つの港に、たまたま足の不自由な鯛釣の名手がいる。この事實は、必要以上に釣人の興味をそそることだったのだ。

永淵からすれば、一番無視出来ないのが、その、体が不自由であるということであつた。自分が苦しんで打ち克^かつて来たことを、相手も超えて来ている。であればこそ、永淵、岸浪と並び称される現在がある。

先方もそう思っているに違いないと永淵は考える。すると、拍手を送ってやりたい気持ちにもなるのだが、同時に近親憎悪に似たものを抱^かえこんでしまったような、やりきれなさを持て余したりもするのだった。

だが、手紙の文章をなん度か読み返すうちに、それらの屈折したものが、すつと、後に退いた。代つて、鼻の奥に、妙に熱いものがこみ上げて来た。

蛇がのたくったようなというが、岸浪の字はそこまで行っていないかった。明らかに書いて貰った上で、それを写生したものだつた。字は書ききらん、と本人が書いているとおりのことが文面ににじんでいた。

、そうか学校にも行けなかつたのか。

そう思った時、脈絡もなく永淵の記憶に蘇よみがえって来たのは小学唱歌『花』であった。

午前三時、父の手が遠慮会釈なく永淵の頬を叩いた。小学校四年生の秋である。

「起きらんか。なんぼしとつか。寝ぐされが」

永淵は頭も体も眼ざめきれぬままで、とに角上体をもたげて寢床の上に座る。そうでもしなければ、次に頬げたに飛んで来る一発は、全く力を加減しないものであることがわかつている。

漁師の朝は早い。だが、永淵父子おやとほど早く港を出て行く漁船はなかった。父と二丁櫓ちうでまだ朝の前ぶれもない港を漕ぎ出して行く。その頃になって、やっと永淵の体から睡氣が抜けて行くのだった。

漁を終えて港に戻る頃には昼飯時になっている。永淵はそれから忍び込むように学校へ行った。週に一日午後に唱歌の時間があつて、その時だけは音楽が専門の老眼鏡をかけた女教師が担任に代つた。

その年の学芸会に歌われるのが二部合唱の『花』で、唱歌の時間にその練習をさせられるのだが、永淵にはうまく歌えなかった。上を歌われれば下にひきずられ、下を歌えば上下を行きつ戻りつする。女教師はそうなるのは永淵が真面目に登校して来ないからだといった。

「あんたは下を歌うグループに並びなさい。でも、ひと言も声を出さないと頂戴ちやうだい。ただ、口をバクバクさせてりゃいいの」

学芸会の前日、遂に女教師は永淵にそういう渡した。その日、永淵は学校を休み、父との漁を終